

4 - 21 石花海北堆の変動地形

Tectonic Relief on the Senoumi-Kita Tai, West of the Suruga Trough

海上保安庁水路部
Hydrographic Department, Maritime Safety Agency

石花海北堆はプレート境界と考えられている駿河トラフの西縁に位置する高まりで、その造構運動が注目されている。昭和56年3月実施した海底地形地質調査で、堆頂面に第四紀以降の形成にかかる変動地形が認められたので概要を報告する。

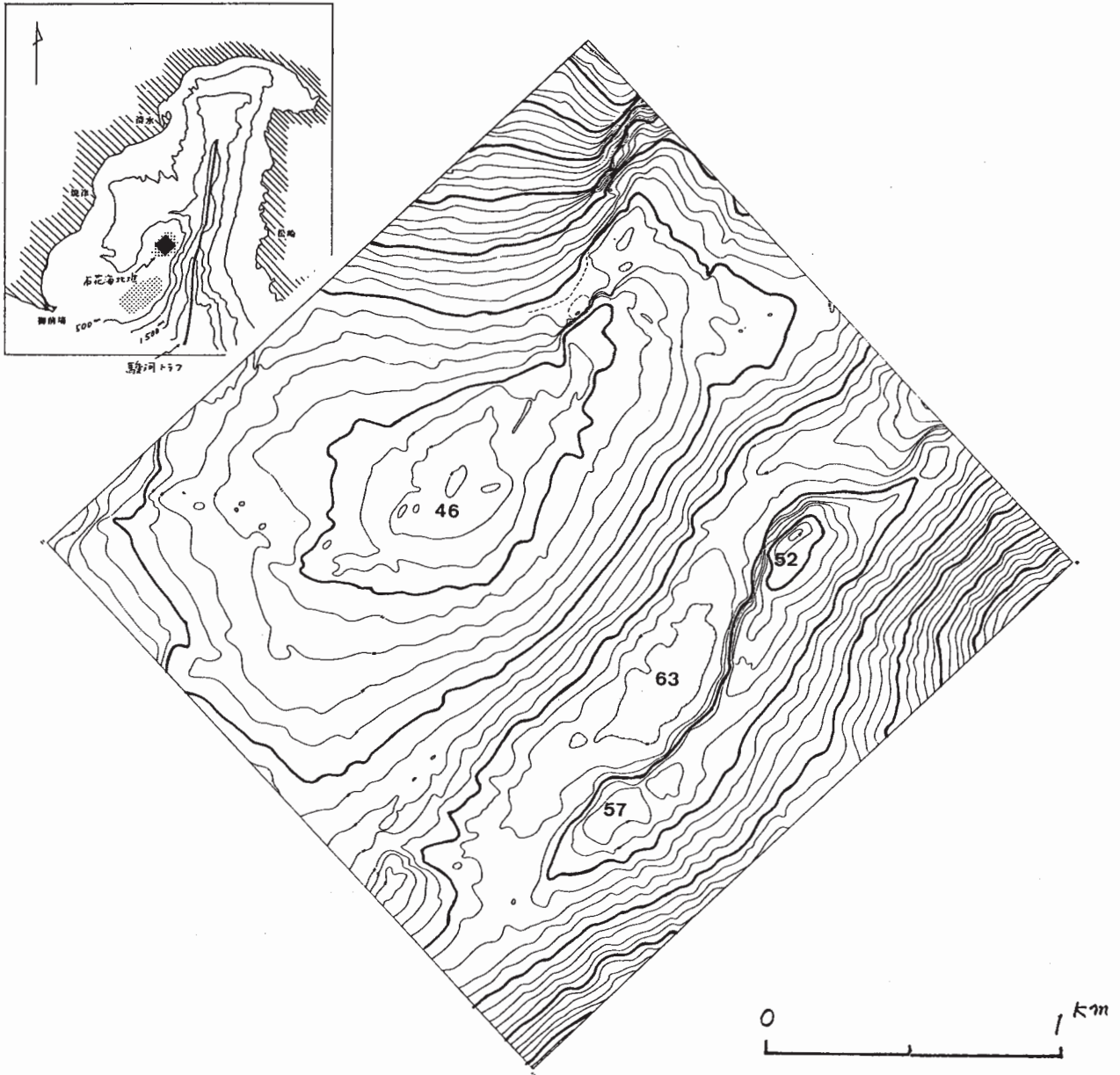
堆頂部はこれまでの調査により、Würm氷期やその前のRiss氷期に対応する海水準低下時に波蝕等の営力により削剥されたものと考えられている¹⁾。本調査によると(第1図)、北に偏った最浅所(-46m)から-60m付近にかけて比較的平坦な面が認められ、日本周辺に広く知られている海底段丘-40m~-60m面に対比される可能性がある。この平坦面は大陸棚に相当する堆頂面と同じように、南に向かって緩やかに深まっている傾向がみられ、後氷期の造構運動を示唆している。

この堆頂面の東半部には3列の顕著な断層崖が発達しており、この中最も南東側のものは第1図の外にある。これらの断層崖はトラフに平行するNNE-SSW、または石花海南・北両堆の軸方向であるNE-SW性の伸びの方向を有し、長さ1~2km、いずれも北西ないし西北西落ち、比高数m~10数mである。これらはantithetic faultを形成しており、駿河トラフを主断層とする副断層として石花海のトラフ側斜面の相対的な沈降運動を示唆している。断層崖の形成時期は大陸棚相当面形成時(約18000年)以降であり、特に-40m~-60m面形成後の可能性が高い。

(桜井 操)

参 考 文 献

- 1) 奈須紀幸・土 隆一・本座栄一：駿河湾西域の海底地質構造，日本地質学会フォッサマグナ討論会資料，1968，191-195.



第1図 石花海北堆の海底地形 等深線間隔：1 m

Fig. 1 Bottom topography of the Senoumi-Kita Tai. Depth contour interval: 1 meter.